

## SY7-5

## 子どもの傷害予防エクイティに向けた非行動変容アプローチ

大野美喜子

産業技術総合研究所 人工知能研究センター

家庭内における予防対策はあまり実施されていないのが現状である。発表者は、この状況が生まれる背景には、3つの大きな原因あると考えている。1つ目は、家庭内の事故予防対策として、人の行動変容に大きく依存しない方法（Passiveアプローチ）の開発が進んでいない点である。階段からの転落予防には階段柵を設置する、など、予防策にほとんど選択肢がないことも対策の実施を難しくしている。2つ目は、これまでの傷害予防教育は、対策実施の重要性や対策法を知らないといった知識の欠如が、対策されていない原因であるという知識欠如型モデルに基づき実践されてきた点にある。しかし、発表者らが取り組んできた研究では、知っていてもできない理由があり、それが対策実施を大きく阻んでいることが分かっている。3つ目は、現状、家庭内の対策実践は、保護者だけに委ねられている点である。2つ目の原因にも関連しているが、対策を実施しようとしても、自分の環境にあった対策グッズを探し、購入し、設置するなど一連のプロセスをこなす必要があり、「どのグッズがよいか分からない」、「どこに売ってるのか知らない」など、対策実施までのバリアを保護者はすべて乗り越える必要がある。子どもの安全エクイティ実現にむけて重要なことは、対策実践に必要な負担を社会で分担させる仕組みである。本発表では、保護者の負担を軽減するための新しいアプローチとして、予防対策実践のための家庭訪問プロジェクトについて述べ、現在、行政やNPO法人と連携しながら進めている傷害予防マイスター制度について紹介する。